

殺戮の規模・私の思考遍歴

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず 大石 久和



前回は、西洋などでは人の死の多くが他殺によってもたらされたものであり、それも大量かつ頻繁であったことと、彼らが生活していた国土が大平原であったことから、人々が集まって安全に暮らすためには、その周辺を強固な壁で囲む都市城壁というインフラを発明したのだと説明した。

これを証明するためには、都市城壁を必然とした中国・中東・ヨーロッパなどでの戦闘の大規模性や残忍性を明らかにしなければならない。ユーラシア大陸において繰り返された紛争において彼らはどれほどの命を毀損したのか。

これがわからなければ筆者の仮説は成立しないから、何年もかけて文献を調査していたのだが、日本人研究者による「戦争における犠牲者数」を調査した研究報告には、まったくどり着けなかったのだ。

日本合戦史的な書物はたくさん出版されているのだが、陣形がどうだったかなどについては説明があるものの、その戦いの厳しさを示す殺戮数に触れたものは皆無であった。研究者が紛争死者数に興味がないのは、わが国での合戦は「時の勢い」のようなもので決まってしまったからで、実際の死者数はきわめて少なかったからではないかと考えたのだ。

なぜそう思うのかと言うと、後に紹介する戦争死の研究者Matthew White氏は、日本

の合戦は「儀式のようなもの」と紹介し（西欧に比しての感想だろう）、日本の戦国時代における死者数すら示していないからである。彼の著書にある日本の唯一例が島原の乱で、その殺戮数は、男性2万人、女性と子供1万7千人というものであった。

この乱に見るように、死者がでなかった戦闘など日本でもあったはずはないが、どうも日本人は戦闘では大量に死んでいないらしいのだ。島原の乱の死者数の多さは、宗教的団結に恐怖心を抱いた幕府が、原城落城の際に殺戮の限りを尽くしたからであった。

世界における殺戮の実態

さて、散々苦労したけれども紛争死の実態がわからないでいたところ、英語に堪能な知人があるホームページの存在を教えてくれた。それがMatthew White氏の「Selected Death Tolls for Wars, Massacres and Atrocities, Before the 20th Century」というものだった。

彼は多くの研究者が計上した紛争死数の平均値を示したりして、過去2000年にわたる紛争死数のランキングをまとめていたのだった。これに掲載された数字は、後の書籍にまとめられた時にはかなり修正されている。

このホームページでは旧約聖書でのmass

killingsが128万3,000人（後に修正）に上るなど、衝撃的な数字も示されていた。事実、旧約聖書の記述は殺戮に満ち満ちている。

こうして過去の紛争による殺戮数を知り、自説の正しさを感じたのが2007年のことだったが、その後、Matthew White氏は2011年に、アメリカで「The Great Big Book of Horrible Things—The Definitive Chronicle of History's 100 Worst Atrocities」を出版し、ニューヨーク・タイムズなどにも取り上げられた。

これを、早川書房が住友進氏の翻訳により、「殺戮の世界史—人類が犯した100の大罪」として2013年3月に発刊した。ここには、われわれ日本人の想像を絶する凄まじい数の紛争死が計上されている。

人類が犯した最大の殺戮や死亡は、第二次世界大戦の6,600万人、次は、チンギス・ハンの世界制覇による4,000万人、同じく、毛沢東の指示または政策の失敗による4,000万人、イギリスのインド支配時の飢饉による死者2,700万人などと、膨大な死者数が計上されている。日本は島原の乱以外には単独では登場してこない。

われわれがよく知っている事例を見てみよう。ベトナム戦争・420万人、ナポレオン戦争・400万人、百年戦争・350万人、フランス宗教戦争・300万人、朝鮮戦争・300万人。

まるで殺戮の歴史といって過言ではないのがユーラシアの歴史なのだ。フランスの宗教戦争など、キリスト教徒とイスラム教徒との戦いではなく、キリスト教徒内部の戦いだったにもかかわらず、これだけの数の殺戮なのだ。宗派に政治が絡んで膨大な死者を生んだのだが、いまでも6,000万人台の人口のフランスは、この戦争当時の1500年代後半にはいったいどの程度の人口だったのだろうか。何割のフランス人が亡くなったのだろうか。

その人口の少ない時代に内戦によって300万人も殺してしまったのだ。この後フランスでは革命が起こるが、ここでも150万人も死亡している。自由と平等と博愛を掲げながら150万人も殺すのかと言いたいのがわれわれ日本人だが、ヨーロッパでは、そうではないのだ。

正義のためには許される殺戮

この状況を考えると、ユーラシアの人々は「正義の実現のためには許される死」があると考えているとしかとらえようがない。誤った情報による間違った戦争だったとも言われる、「9.11」の報復のようなイラク・フセイン攻撃も、掲げたのは「正義のための戦い」だったが、われわれ日本人にはストンと胸に落ちるようには納得できる戦争ではなかった。

大量殺戮兵器などイラク国内から発見されないまま、いつの間にか「独裁者フセインから政権を奪い、民主主義を確立する」などという方向に転換した。

アメリカに意見など言える国ではないから、わが国もついて行かざるを得なかったのだが、多くの日本人がまるで納得感が持てなかったというのが真相だろう。

旧約聖書に記載された殺戮数は、116万7千人に及ぶとMatthew White氏は著書では修正している。神が約束したカナン之地に達するためには、すでにそこに住んでいた人々を抹殺しなければならなかったのだが、それは「正義にかなう」もので許されるものなのだ。

これは、われわれの感覚と完全にズレている。しかし、全世界的には「ズレた感覚を持つのはわれわれ日本人の方」なのだが、われわれにその自覚はあるのかということなのだ。